

## 田園将蕪

吉田鎮男(地質)

名古屋の街に比べて、東京の街はごみごみときたなく、車が渦巻いて息苦しい。それに合わせるかのように、名大構内に比べ東大構内は散らかり、車があふれている。道路ぎわや側溝にはごみがたまり、用済みの立看は生け垣に立て掛けられたままで木を枯らしてしまっている。雑草が生い茂っている。東京の人々はもう、清潔とか閑静といったものへの感受性を失なってしまったのだろうか。

研究や勉強にとって環境などどうでもよいという、ロボットのように強じんな人もなかにはいるだろうが、一般には良い環境が豊かな人間性をはぐくみ、すぐれた人材を育て、独創的な研究を生むと思われる。環境という肥やしは、20年とか50年といった期間をかけて効いてくるものだろう。昨今の東大生には利己的で思いやりのないが多く、これは偏差値教育のせいではないかといわれている。しかし本性利己的な学生が多いわけではあるまい。問題は、こういう学生を、すさんだ環境で研究してきた教師が、すさんだ環境の中で教育するということである。次代の東大の教師・研究者のことを考えるならば、今手をうつべきであろう。

まず、構内を走る車・駐車する車は厳しく制限

すべきである。教職員の通勤用の車は、原則として50才以上にだけ認める。学生のそれは原則として認めない。業者その他の学外の車は、大学の2~3カ所に立体駐車場を設けて駐車させ(人件費など管理実費程度の駐車料を取る)原則として構内の走行を禁じる。駐車場を作る資金が問題であるが、大学の営繕費を他のいかなるものより優先させて、これに当てることができないものであろうか。これは、研究・教育にとって、現在なものにもまして必要かつ投資価値があるもの一つではないかと思う。

構内の清掃・美化は、もし予算がないのなら、各建物単位くらいで受持を定め、たとえば40才以下の全教職員と全学生で年2回くらい大掃除をやればよいのでないか。

東大は、研究・教育の質において他の多くの大学の目標となるべきであり、また日本の将来への指針を与えるべきである。それには、今の汚く暗い東大を、磨き上げて明るくすることが急務のように思われる。

(昭和58年7月1日、名大・理・地球  
より転任)

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。